

---

**駆られる爆ぜる、担って飛べる。**

富美霞一等星

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

駆られる爆ぜる、担って飛べる。

### 【Nコード】

N1355B

### 【作者名】

富美霞一等星

### 【あらすじ】

紅白のルーレットの最中、緑を持つ僕を抹殺すると口上で明示する新品傑作。縦覧者、否、銃乱射を受け持つクロノバに、出す手も打つ手も見つからず、拳句が果てる前に僕は破滅の天才『目下の大熊猫』に救済を求めるのだった。

駆られる爆ぜる、担って飛べる。 （前書き）

行き過ぎた怪奇と出来すぎた数奇は、控え目の僕と相殺するかと、そう、てつきり思っていたのだけれども、

思い違いのすれ違い、摩擦熱で火花を散らした膨れっ面。

同調して、浸透して、符合して、一致して、

珈琲と牛乳の様に黒の半透明を作りさえすれば、

少しは話が戻ったのかなあ。なんて、顧みたり。

なんて、戯言を遣ってみたり。

駆られる爆ぜる、担って飛べる。

僕のほんの知り合いの、ほんの知り合いに値する人物こそがこの神品傑作という名の男であった。

近いようで遠く、又、この様に会ってしまえば矢張り近い存在だったとも思える両者選ばれた際会の場合は皮肉にもクロノバの真正面。そして、このクロノバの所在、存続こそが、まるで僕と彼が出会ったこの様、必然は偶然の名目で現れる事を証明していた。そうだ。そう言わざるを得ないのである。僕と彼が鉢合わせる偶然と等しく、僕と彼のそれぞれもクロノバに遭遇したのだから。

異人だった。

僕が面識を持った二者はそれはもう、殊更に殊更な異人だった。

如何程にネジが外れているかと問う以前、一般人が彼らを一見すればネジもう遙か昔に嵌っていなかった、そうでなければネジなんて初めから皆無であったと簡単に理解できよう異人だった。

だから。だからこそ、理解できてしまうだけに、その所為で僕は悩んだのだった。巻かれる為のぜんまいがない彼らは何で作動するのだろうか、と。

言わば、一挙一動が不思議なのではなくて、一挙一動する事そのものが至って不思議なのだ。

偽りの効かない単純が偽っているのか。それならば、いつそ本体そのものが虚像であると、思ったほうがまだ楽だった。

そんな出会いだった。

「うわああああ、相変わらず相変わらず相変わらずだよね！」

僕の、ほんの旧友がほんの旧友へ指を指した。たすきの様、片目に掛けられた包帯が取り除かれた顔は、当たり前だが包帯を巻く前

と同じ形状をしている。

「一体、俺の顔にどんな変化を期待してたんだ？」

指を指された知り合いはしかし無表情で、たった今自分の顔から外した包帯の端を持ち手首を手前へと返した。包帯は骨を持った様にピンと張りを見せ、彼の左肩の上に伸びる。そして彼が再び甲を返すと、その勢いだけで包帯が、僕の視界を左から右へ一瞬で飛んだ。包帯は円柱のゴミ箱を三回程回転させた後、底へと収まる。

包帯を針金の様に扱い、プラスチックの筒が転がり落ちるぎりぎりの均衡を打つ曲芸。無論、種も仕掛けも存在してはいなかった。この絶妙な技巧をこらす、彼の名を藤堂時司と言う。

もう一人の旧友がぽんぽんと手を叩いて賛美する。

「にやはは。包帯の繊維って意外と硬いよね。君が本気を出せば、矢みたいにして人も刺せるんじゃない？」

けけけけらと小馬鹿に笑う顔、綻びの生じるその顔にすら左右のずれは一寸も無い。完璧にはしゃぐ、彼女の方の名は綿蓄しずると言う。

彼女がその欠けの無い笑い顔で突飛なことを言うのは別に今に始まったことでは決して無いが、対称に吊りあがった唇の様に、彼女の台詞には矛盾など存在しない。

彼女は嘘をつかないのだ。

きつと、綿蓄の脳内では包帯の形態と性質から矢として成立するのに必要なスピードなどが割り出され、それが藤堂の技能を下回ったのだらう。彼女の計算した物理法則には徹頭徹尾に至ってミスが無い。その中には空気抵抗や重力もろもろ、まして微妙な湿度状態まで想定に含まれているに違いない。

つまり、綿蓄は嘘を吐けないというか、真実しか言葉に出来ないのである。虚実や妄言や戯言なんて彼女は知らない。

正しく、無欠故の宿命といわんばかりだ。

まあ、僕が包帯で殺された際には、藤堂の所へ化けて出ることにしよう。

……正直想像したくないな。

無差別遠隔殺人。

凶器は包帯。

返り血を貪欲に吸い込んだ包帯。

怖っ！

「それで、何故こいつを連れてきたんだい？」

藤堂に睨まれる僕。平素からこんな顔をしている奴だが、いつ彼の腕に巻かれた包帯で刺されても可笑しくない。

「それはね、彼、会っちゃったんだってさ」

藤堂の問いには綿蕾が答える。人懐こい顔も異様なテンションも、藤堂と酷く対蹠的であった。彼と彼女、二人でいる時、いつもこんな感じなのだろうか。

そして。

「どっち？」

と、藤堂はそれだけ言い。

「両方」

と、綿蕾はそれだけ言い。

それから、数秒の沈黙。

彼の部屋は個室であった。それでも、ベット脇の小窓から子供がなにやらを叫ぶ声が聞こえる。

病棟の、五階の、入院患者。

見る通りに言ってしまえば、彼は今、壊せる体じゃあなかった。

彼にとて、壊すは生業でなく様相。

有様を壊すのは決して容易ではあらず。

それを易々と。

「まあ、いいんじゃないの？ 借りは一括返済って事で」

と、綿蕾は静寂を切り、彼が首肯を認めた所で又一区切り。

トントんと、二度切れ。

三者が本当の三者となつて。

「一先ず、僕たちは旅行に行かなくちゃあならないから、この話は

その後ね」

と、僕が肩透しを食らった。

ところで、藤堂が座布団を投げれば、それが円形カッターになったりしちやったりするのだろうか。

摘んで抓って、捻った言葉。（前書き）

摘んで取れるネジ。

抓って取れるネジ。

捻って取れるネジ。

言葉で解かれるネジ。

ネジを外すなんて難しい事じゃあない。

むしろ難しいのは、摘むこと、抓ること、捻ること。

そして言葉。

それが戯言。

## 摘んで抓って、捻った言葉。

破壊と再生、互いに対義を持つは時に類義と言えて、又、その二つは実は同等に扱われるべきなのだから、壊したものを戻せないなんて台詞は易々と口にしちゃいけない。

この論を弄すれば、つまり、野菜からカレールーを作る事が出来るならば、カレールーから野菜を作る事も不可能ではないということだ。一見、無理そうに聞こえて、実際はそうではない。単にカレールーから野菜の要素を抽出すれば良い。すべて同じこと。

粉々のコンクリートやプラスチックだって、高熱で溶かして低熱で固めれば元通りだ。

それだけなら、僕でも納得が出来るし、何より僕でも可能だ。

しかし、クロノバにはそれが出来ない。

破壊は其の儘の癖、彼には創造というニュアンスが無い。

変わりに、クロノバ同等交換という特殊能力を持っていた。

その対象が触れて崩れるものであっても、放って死ぬものであっても、軸に微々たる接点があれば、そこから反転される能力。それ故、存在そのものが危険因子なのだ。近づけば、彼の欠如がそっくりそのまま擦り付けられる。あたかも銃乱射である。

破壊一筋。まるで、藤堂に似ていて、藤堂より冷たい。

そこに、創造なんて必要ない。そんなもの、かえって不純物になるだけだ。

クロノバは上肢を上げて言った。

「不必要が私の存在で、不必要の不必要が私の存在を引き止めるもの。あるはずの無いもの、そして、あつてはならない一方的な契約と交換」くつくつと口の端から笑いを漏らし、彼は黒猫の姿をそこで止める。人型、人肌を被った偽者がそこに現れる。「しかし、どっちだろうね、不必要は。最近、私はそこが判らなくてね。地球が

コンピュータの紛い物だということだけは、はっきりしているけどね」

そう言い切って、目を線にして。口を下に曲げて、頬を赤から白へ、鼻を鳴らし。そして、眉に掛かった金髪と、後頭部の茶髪が静電気でびりびりと逆立たせて。

電磁空間、否、トレースの一環。

この世こそ偽者だと、彼は言った。

「後付けられた世を悪くは言えないさ。それに、後者が必ずしも滅びなければならぬ筋合いもない。更には本物を真似た本物だつてある」と、横から、僕の右耳を直に。鳥の鳴く声で神品傑作が囁く。まるで囀り、音響が余韻の如く僕の脳に残る。芸術が成す声だった。

クロノバは、ははあ、と長嘆し、言った。

「真物から生まれる真物か、それも一理あるな」

声が、新品と同じそれだった。彼の声は、クロノバに盗まれた。いいや、違う。彼の声は唯交換をされただけ。以上や以下なんて有無は皆無。声は声だ。

「ああ、やられてしまった」

と、神品は呟く。猫の声で、遣る瀬無く、面倒臭そうに。

そして、飛んだ。

神品傑作は、存在が芸術の域だった。彼が何かをすれば、それが逸品となり、彼が何かをしなくとも、その存在が逸品となる。左足を上げてからそれをたたんで、右足を軸に回り、一気に押し出す。一々のモーションが恐ろしいほど緩慢である一蹴。多分に無駄のある、一蹴を見舞い、しかし、それでもどよみなくクロノバに直撃したのだった。そして、そこからどぐりどぐりどぐりどぐり、風がクロノバの被る皮と肉を抉る音を発する。

その音すら、心地良く聞こえたのだった。温かい音色だった。それに僕は酷い戦慄を覚える。もし僕が彼に殺される様なことがあっても、それが人には心持ち良く感じることだろう。勿論、僕自身も

含めて、だ。安楽死よりよっぽどたちが悪い。

クロノバの肢体が綺麗に二体へと捌かれ、そこからワンテンポ、四分の一拍子ほど遅れて黒い液体が重力に従ってみせる。更に。更にだ、ツーテンポ遅れて、申し分なさそうにクロノバの体が元に戻る。つまり、入れ替わったという事。

同等交換をした。

神品が決して猫とされた訳じゃあないが、いつそ其の儘、体がすっぱりギロチンにでも絶たれた様に、彼の体が体ではなくなった。一間だが一瞬、刹那と言うには遅すぎる現象。超自然現象だった。しかし、二つに分けられて尚、新品は言葉を続けた。

「気に入らない、気に入らないから今日はお引取りとしようかな。次に会うときはもっとましな格好をしてくるよ、君に交換されても恥のない様にね」

そう言った。

お前は不死身か？

それから、神品は風と共に、クロノバは土と化して去った。

と、僕は先週の出来事を綿薐に話した。

彼女の答えはこうだ。

「その通り、彼、神品傑作は立派な不死身さんだよ」

この世に立派じゃない不死身なんているのか。いや、そもそも不死身って……、ああ、そんな馬鹿な。

「聞いても理解できないだろうけど、一応話して」

承り。綿薐は左掌を右肩に、右掌を右頬にあて、面白くなさそうに、しかし面倒な様子も見せぬ俛、説明を始める。

「そうだねえ、芸術作品って現れようが無くなるうが関係ないでしょ、それって結局儚そうに見えて永遠なんだよね。まあ、彼の存在は何者でもない逸品で落ちついたっていう結果さ」

「うんうん、そういう点で言えば、彼もそれなりに死んではいるってことなんだな」

綿蕾は大きく頷いた。

「なんだ、判ってんじゃん。君って藤堂の君よりも頭いいんじゃないの？っていうか僕より要領バッチグーじゃね？」

途轍もねえ過大評価だ。しかも褒められている様だが全然笑えない。

「そこまで僕は人間を捨てた覚えは無い」

酷いなあ、僕だって人間だよ。まあ最前線の最先端を歩いてることにゃあ変わりないけどさ、とそんな感じのことを飄然とぬかして、彼女は解説を再開する。

「心に響く情景だってそりゃあ永遠じゃあない。それは情景が力不足なのではなくて、人間の頭が脆弱だからさ。無論、その情景を勝手に評価したのも人間だし、勝手に覚えるのも人間なんだけどね。それじゃあ、何故神品が不死身かって話になるよね」

ほら、だんだん意味不明になってきた。お前の言うとおりだ。人間の脳髓は所詮人間の一部でしかあらず。人には人の限界ってものがある。

つまるところ、僕は情弱。

そんな僕の様子を見取って綿蕾は少し話を注解してくれた。

「まあ、君の先程の発言から思うに神品は壊れぬのではなく、再生されているって事には気がついたんだよね。それだけでも上等だよ、でも僕が言いたいのは再生にすら限度があるってこと。再生する間の物質は八の字を描き続けることも出来る、がしかし、それでも永遠なんだよ。彼の再生過程は巻き戻しだから」

巻き戻し、か。無論、彼が自己を戻すのではない。

僕らの心底に宿る回想が、彼を呼び戻すのだろう。

「今更だけど、極簡単に言えば、神品イコール芸術。芸術イコール不滅、これで彼の原理は十分でしょ」

そこで僕は制止の意味で掌を綿蕾に見せる。

「構造上人間は忘れる生物だ。いいや、それだけじゃない。僕だって君だって例外なく皆、いつかは死ぬ。それじゃあ、僕らと同じよ

うに、彼だつていつかは死ぬだろう」

と、僕は言い、そしてはっとする。

そうか。クロノバがいた。奴は自体そのものを入れ替えるが、中身は永久。そこに神品のデータバンクがあれば、そこから彼が巻き戻すことが可能だ。

……、と待て。

「そしたら、話をもつとややこしくなる」

「じゃあ、もういいよ。君がこれ以上考えることはない。これ以下に考える必要はあるけど。どういうことが判るよね」

そうだった。

僕は彼らに狙われているのだった。

僕が緑という理由で。

「まあ、直接的、物理的な衝撃からは藤堂の君が全部守ってくれるさ。問題は間接的なものだね、例えばクロノバの同等交換とか。彼の入院理由もあれだし。まあ、体を返してもらっただけマシと考えるのが至当か」

もしくは自我の正当化とも言える。綿蕾はそう付け足し、踵を返す。

「それじゃあ僕は、旅行に行く。何、アクションスタートさ、これからは殴り合いの罵り合い。抜きつ抜かれつつ、立っては倒れ、消して現れのオンパレードだよ。まあ、最後のは相手に限ってだけど。大丈夫、僕らがつけば、安心二割増し、起爆率五割増し。何事も盛大にやろうぜ。僕も少しは頭使つてあげるからさ」

最後の方は耳を済ましてやっとな聞こえるほどの声だった。言い終わったと同時に大通りを左に曲がる。視界から綿蕾が消えた。

ここからが竜巻の始まり。少人数の大戦争が鬱陶しいほど静かに幕を開けた。

削ぎ削ぎ削ぎ、馴染む。(前書き)

物質は削がれて初めて道具になる。

割られて減って

分けられて失って

落ちて落ちて。

道具とゴミが誕生する。

対称物は常に一体。

それすらも戯言。

## 削ぎ削ぎ削ぎ、馴染む。

ベア、アンダー、ザ、アイズこと『目下の大熊猫』といえば、一昔前、一部の裏内情に名を馳せた藤堂時司の渾名である。

あざなに至るまでの説は多様多種、それぞれがそれぞれ恣に解釈をしているが、行き着く結論は皆同じで、畢竟、彼を一度視界に納めた者は二度と眠ることは出来ないという意味合いを持っている。

まあ、この説に関しては誇張もいいところで、事実、藤堂と面識を持つ僕が不眠症ということは断じてない。一種の御伽噺の様なものと思ってくれば幸いである。

さて、実を言えば僕と藤堂はあまり親しい仲ではない。だから藤堂が破壊の天才だとは知ってはいても、その経緯や経由や過程、そして能力全般に対するパラメータは空白の俤だった。

アビリティがノーデータでも、その名だけで泣く子の顎を外すぐらいだから、彼を信頼しないなんて事は一切無いのだけれど。しかしそれじゃあ、幾らなんでも一抹の不安は拭い切れぬ。なんせ僕の相手は不死身と銃乱射だから。死にたいとはここ最近思っていたが、化け物に殺されるのは真つ平御免だ。僕は、彼がその名を通わすほどの人材であるかこの期に調べることにした。

「アーハハ、それでもって君はここにいるんだね」

梅宮李は片手でキーボードを打ちながら、片手で僕に珈琲を出した。

「ちょっと待て。この珈琲、お前が飲んだ奴だろ」

「新しく淹れんのめんどくさいし、もういらないから全部飲んじゃってよ」

僕は排水溝か。

「藤堂なんて調べるまでもないけど……、ほらよい」

中指でパチンとボードを一打。僕の体とどっこいどっこの表面

積を持つ大画面にはちきれんばかりのフォルダが現れた。

梅宮の部屋はワンルーム、ほぼ電機で構築されている。壁に埋まった、到底僕には用途が理解できない周辺機器の数々と、梅宮を覆うようにして置かれた五つのコンピュータが佇む様に置かれていて更に天井にぶら下がった無数のコンセントと、地下から生えている無数のコードがメドウーサの頭の如くいい感じに絡み合って、もう訳が分からない。僕には一生縁の無いものが、視界一杯に埋め尽くされているのだから仕方ないだろう。

「マウスぐらいは使えるだろ？これが、あれに繋がってるから。あとは勝手に見てて。漏れはちよいと部屋の掃除といくよ」

と、立ち上がって梅宮は席を空けてくれる。

「ああ、出来るだけ綺麗にしてくれ」

僕はマウスを受け取り、ファイルを片っ端から開いた。

「お前さあ、キッチンの無い部屋でよく生活出来るよな。生活習慣病とか大丈夫なのか？」

「うん、コンビニ弁当と自炊は三対二で頑張って抑えてるよ。自炊だったって、如如たんが作ってくれるご飯だけだ」

「ああ、鼓矢か。あいつどこにいるかと思ったたらこんなところで遊んでたのか」

鼓矢如如。藤堂と同じく過去に一世を風靡した奴である。数ヶ月前から音沙汰が無くなり、僕の近所では悪魔と契約をしたという噂が流れていた。

「如如たんは相変わらずだよ、たまに外に出てなんかやってるっぽいし」

「そうか、それなら心配は要らないな」

背後でゴサゴサとビニール袋が大きく動く音がする。片っ端から分別なく必要ないものをつっ込んでいるのだろう。僕も、目の前のデータを頭に詰める事しよう。

藤堂時司。

詐欺師の父と看護婦の母を持つ。両者とも存命中で、年は百歳前後。彼の持つ破壊の才能とは、又体質の様なものであり、一日に一つ以上の物質を無意識の内に壊す。素手が多いが、時折道具を使うこともある。数度、両親を襲うこともあり、その際、父の両腕と母の肝臓が壊されている。十五に『蛮族』という殺し屋のグループに加入。すぐにその能力が認められ重役に付く。一間で目下に忍び、直接的な物理攻撃をする殺し方と影と同調する様子を皮肉り、更にその驚異的な形相の恐ろしさから『目下の大熊猫』という名で世を轟かせた。しかし、彼が十八の時に『蛮族』が崩壊。原因は不明。その後、藤堂は蒸発。

こんな感じのことが遠まわしに長々と綴られていた。付属の写真データが現在の藤堂の顔とは大きく異なっていたので、この情報すら信じていいものだろうか。まあ、恐らく、この写真に写っているのは藤堂が変装している姿だ。僕はそう目星を付け、必死に文字を頭に写した。

「分からないなあ、情報が知りたければ直に訊ねれば良いじゃないか」

と、先に掃除を終えたらしい梅宮が画面と僕の間介入する。

「だってあいつ怖いし」

「大丈夫、ある国のある法則によれば、殺し屋はプライベートじゃ人を殺さないらしいから」

「藤堂はもう殺し屋じゃないだろ。ってかその法則も確率論でしかない訳だし」

と、僕の言葉を聞くと否や、梅宮はコンコンと額を叩いた。

「確率論って言えばね、梅宮様の正解率九十五パーセントの直感によれば、……ああ、やっぱりいいや」

「いや、最後まで言えよ！」

梅宮は勿体つけるように、唇に人差し指を当て暫く動かなかった。それから三呼吸ぐらい。

彼女は口を開く。

その確率論は、突飛しているところか陥没した案で、僕にすら思いつく可能性だっただけに。

驚愕した。

二三ほど礼の言葉を述べて、僕は梅宮の隠れ家を後とする。

その帰り道、僕は神品傑作に会った。

向かい側から一步一步と風と同調して歩く相貌に空気を見ていると曲解してしまいそうになる。その癖、ついその姿に頭を下げてしまいそうな神々しい雰囲気。毎時、姿形を変える彼だが、それでもすぐに神品と判別できた。

「でああ！」

つてか、襲われた。

手が、僕の鳩尾を狙って飛んでくる。

「うおっ！！」

幸い距離があったので、彼の突きは後ろに仰け反ることで避けることが出来た。風が、僕の顔を切る。

何故、ここにいる。

何故、僕を狙う。

次の行動をすぐに考える。

ここは公道だが、田舎なだけに時間帯からみて通行人が来るとは思えない。いいや、違う。そうじゃない。来たとしてもなんら変わらないんだ。見られようが見られまいが、新品に困る要素は無い。

むしろ、殺されたら困るのは僕。

どうする。走ってどこに逃げる。逃げてどうする。隠れても無駄。抵抗する。いや、それこそ無意味。何をして、同じ結末だ。

それじゃあ、僕は何をすればよいのだ。

僕は新品の走り、

「タイム！ストップストップ！！」

彼を制止した。

「……」

「……いや、何？」

なんと言うか、素直に止まってくれた。

「……、君ん家の聖書によれば、僕を殺すのはまだまだ先の話だったんじゃないのかい？」

誰が作ったか知らない緑色の旧約聖書。そこに記されている、誰かが作った身勝手なルール。まるで濡れ衣。無実の罪で指名手配。もしくはロシアンルーレット。人種差別とも言い得る。

聖書が緑という理由で。

僕が緑という理由で。

今、僕が殺されようとしている。

神品は単調に。美しい単調で。アナウンスの様なイントネーションで、僕に伝達した。

「君がのうのうと生きていると思うと頭が煮えてきてね。こう体が勝手に動いてしまうんだよ」

随分、嫌悪の対象とされている。ダーツの的代わりにされている気分だ。

まるで滅茶苦茶。強要の唯々諾々。

しかし、まだ僕と神品は出会うべきではない。

「落ち着け。自分の信仰する聖書の内容ぐらいきちんと守るべきだろ、おつ、うがやあ?!」

空から、僕目掛けて槍が降ってきた。

一発目は前に倒れて。二発目は横に転がって避ける。

驚の様な声で、新品は言った。

「すまない。君の顔を見て怒り倍増」

「ち、畜生！」

説得の余地すらないのかよ！

僕は、足を波の様にうねらせ、腹筋の力で立ち上がり、逃げた。勿論分かっていた。無駄な抵抗だと。

がちんがちんがちんがちんがちんがちんがちんがちんがちんがち

んがちんがちんがちがちがちがちがちがちと、空という空から無秩序な槍の雨がコンクリートを打ち付ける。

前後左右、全てが攻撃範囲。

ああ。折角、藤堂や綿蕾に頭を下げ、梅宮を訊ねてまでしたのに。情けないが、終わりだ。

そう思った。

無論、まだ死なないのだけれども。

死ねないのだけれども。

「ニヤッハッー！」

日に重なる黒い影をそこで見た。その影は落ちる槍を手一本ずつ持ち、僕の真上で他の重力の俤に落ちる槍を蹴って蹴って蹴って蹴って、宙に浮き続けた。

僕に向かって雨は落ちない。変わりに周りにばらばらと山が積もってゆく。

僕は安堵する。

「鼓矢、久しぶり」

「ヒヤッキヤー！」

発狂中の彼女に僕の言葉は通じなかった。

崩して回して丸めて建てる（前書き）

繰り返す繰り返す繰り返す。  
建てては崩し、又建てる。

空を飛ぶは落ちるの内。  
宙を落ちるは飛ぶの内。  
回って回って返ってくる。  
同じ形で戻ってくる。

結局変わらない。

二極は、端と端で繋がっている。

又、これを戯言と言う。

崩して回して丸めて建てる

発狂した鼓矢を止める方法は二つ。

一つは彼女を気が済むまで暴走させること。

一つは彼女を物理的に動けなくすること。

今回は前者となった。

「鼓矢、お疲れ様」

と、僕は公園のベンチに座る鼓矢に缶ジュースを渡した。延命のお返しが道端に百二十円で売られている商品。勿論、均衡が取れているとは思えない。それでも彼女は心底嬉しそうだった。

「うわあ、これ貰っていいんですか？ にやう、有難う御座います。タダで飲む清涼飲料ほど美味なものはありませんからね！ それじゃあ、頂きます。……、うああああ、タブが折れちゃいました！

どうでしょう、缶が開けられません。取ってが。取っ手が折れちゃって、御免なさい御免なさい、缶開きません！ああ、バキッて、これですよ。こいつです、こいつが悪いんです」

と、慌てて折れたタブを僕に見せる。

ああ、微笑ましい。こういうのを癒し系って言うのだろうか。

「いいよ、もう一本買ってくるから」

「いいえ、駄目です！ この如如めがこいつをがち割ってみせます！」

「いや、割っちゃったら飲めるものも飲めないし」

「はあ！ そうですね。不手際でした。それじゃあ、石を使って抉じ開けます！」

「そんな原始的な……」

「うっ！ 鼓矢はジャワ猿人ですか？！」

「あ、ごめん」

「いやいや！ 先輩が謝る必要はナッシングです！ タペストリーからサインカーブに至って全責任はこの鼓矢めにあるのです！」

「……やっぱ、新しく買ってくるね」

と、僕は非難の声を上げる鼓矢に取り合うことなくその場を足早に去った。

鼓矢如如に出会ったのは何年振りだろうか。本当に久しぶりだ。綿蕾に劣らないテンションと、あの慌て方。妙に博識な、馬鹿。何も変わってない。

鼓矢とは、昔一寸、何かの弾みで消失してしまいそうな本当に一寸した事で利害が一致し、共同線を張った悪友だった。その人当たりの良さから沢山の仲間を作り、馬鹿としか言い様がない無計画で突飛な行動により、沢山の敵を作り。仕舞いには、その敵を一掃してみせて、その一場面、一部始終を見せ付けられた僕は、どんな事が起こっても彼女に楯突かない様にしようと密かに心に刻んだ。それから彼女と少し話をして、とある組織に入っていたという共通点を見つけて。そこには僕と鼓矢、どちらが先に加入したか定かではないものの、僕が彼女より年上だという理由から彼女は僕を先輩と呼び、会話が弾んで更に親密になって。それから、度々彼女に会うことがあったり無かったり。

僕は自動販売機の前で小銭を落とす。

うぬ、つい物思いに耽ってしまった。先程襲われたばかりだと言うのに、ここで又奇襲されたら鼓矢の救助そのものが無意味になってしまう。

神品は、もう帰ったのだけれども。

鼓矢が吹っ飛ばしてくれた。

降り注ぐ槍を蹴り伝って宙に浮き続け、僕を槍の襲撃から守ってくれた鼓矢は、更にその体、細く小さな矮躯を蹴りの勢いで縦に回して、前もって手に持った槍を神品目掛けて投げた。

投げたように見えた。目では追いつけなかったが。それが、神品に命中したのだろう。彼の体が後ろに仰け反ったかと思えば、右胸に穴が開いていた。貫通、していた。

「友達が多いっていいよね、君が羨ましいよ」

そんな感じの捨て台詞を言って、神品は再び異界へと帰っていった。

と、まあ大まかな話の流れ。

公園に戻ってみれば、鼓矢はアルミ缶を抱えて苦悶していた。あてもこうでもにっちもさっちも笑っていいともおーいえい、と。意味不明な片言を呟きながら。

「お待たせ」

僕が声をかけると、よっぱど思い詰めていたのか鼓矢はびよびよんと驚きのあまり飛び上がる。

「うおう、これぞ正しく仰天ですな」

「ほら、飲めよ」

新たな缶ジュースを手渡し、鼓矢の顔が再び輝く。

「うはあ！ 本当は本当に申し訳ない。お涙頂戴オンパレード。それじゃあ頂きます！ ……うは？」

こいつ、又タブ折りやがった。

「……、うっ、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。これは深謝ものなのです、うあっ、ぐす」

マジ泣きされた。

「いや、気に病むな。大丈夫、又買ってやるからさ」

「い、いえ……、いいんですよ。買ってきて貰ったって、又、鼓矢が折っちゃいますから」

言葉に詰まる僕。否定できなかった。

「ええと、それじゃあこれから家に行くか。茶ぐらいなら幾らでもあるからさ」

僕は、鼓矢を立たせ、背中を押しながら言う。

正直、ボディガードの意味も兼ねていた。

神品が勝手に僕を殺すと公言し、加えてその日時を指定した癖、それを破ってくるなんてルール違反だが。そもそも彼らにルールなんてものは存在しない。

今、それが身を以って分かった。

だから、藤堂がない今、戦闘能力を持つ何者かが近くに欲しかったのである。

「先輩の家は先輩に似合わず綺麗ですね」

彼女には悪気が無い。単に頭が悪いのである。だから、僕がこんな台詞に一々目くじらを立てることも無い。一先ずは彼女の為に茶の準備を始めるとする。

「しかし、今思いました。先輩酷いです」

彼女は悪い意味で人を思う思考回路なんて持ち合わせてなどない。だから、この台詞もあえて受け流す。僕はテーブルを雑巾で拭き、彼女を椅子に座らせ、トレイにティーセット一式を乗せ、鼓矢の向かいに座る。

「はつきり言つて、外道だと思います。下種つて程じゃありませんが」

「僕は一体お前に何かしたのか?!」

「いいえ、はい。」

「どっち?!」

「イエスです。梅宮さんが鼓矢の事をあなたに伝えない訳ありませんからね。近くに来たのですから挨拶の百や二百はあつていいと思います。しかも、なんですか、さっきの奴は。鼓矢の助けがなければ死んでいるところです。何か、戦争の匂いがするですよ。それなのに、鼓矢を頼つても来なかったのです」

「ああ、そのことか」

あえて僕が彼女に会わなかった理由はあの時点で三つ。

一つ、彼女が強いから。神品との戦闘で改めて思った。鼓矢は強い。しかし、その強さが又危ない。僕の現状を知れば、彼女は僕を守りに来るだろう。命を懸けて。しかし、相手は不死身と銃乱射。この戦いの仕組みは殴れば勝つという単純なものじゃない。だから、敗北の可能性を否めない。つまり、鼓矢には死なれたくないというのが僕の本音だ。あまり親しくない藤堂に護衛の依頼をしたのは、又この理由からである。

一つ、鼓矢を梅宮から奪えば、梅宮が危ない。生活習慣病だけの話じゃない。そもそも梅宮があ部屋にある機械ほとんどをフル始動させていた事自体が稀有だ。幾度か彼女の部屋に足を踏み入れたことはあったが、あそこまで金属が軋む音を聞いたのは生まれて初めてだった。ただ事じゃあない。恐らく、梅宮の近くでも何かが起こっている。証拠に鼓矢が彼女の近くで構えているじゃないか。だから、駄目だ。兎に角、鼓矢に僕の危険が察知されることだけは避けなければならないのだ。

そして、一つ。

「いや、面倒だったしさ」

「つつ」

鼓矢は一気に顔を赤くする。しかし、口が開いたまま動かない。狼狽というよりは、憤怒の表情。

「実は、別にどっちでもよかったんだ。訪れるのもよし。帰るのもよし。唯さ、なんか、嫌な予感とは違うけど。鼓矢に会う事で途轍もなく何かの意図が、幾千の系の如くクルグルと渦巻く、蠢く形態が想像出来てな。本当に悪かったとは思っているけど。まあ、お前とは、いつでも会おうと思えば会えるし」

「う、嘘ですよ。鼓矢の消息は現在完璧に抹消。跡形は残っても鼓矢がそこには残ってないのです。鼓矢に会いたい時會おうなんて、そんな甚だしい事を考えていたんですか?!」

「ああ、そうだね。いや、やっぱそれも感覚なんだよ。同じ組織にいた者同士だし、なんか鼓矢と僕、共通点多いしさ。ああ、全然論理的じゃないか。でも、会える気がしなくもない」

「……」

鼓矢が僕を見る。射抜く程鋭く、蛇の如く鋭く。

「それに、悪いけどさ、鼓矢が幾ら手足を引っ込めたって、梅宮に聞けば一発だし。消息を消す時だって、梅宮に頼んだんだろ？」

「……」

あれ、正解だ。

少し、予想外。てつきり、自分で全部手回したかと思ったら。意外と他力本願だった。

「まあ、でも今となっちゃって奴かな。梅宮には少し踏ん張ってもらうとしよう。鼓矢！」

「……、あつ、はい。なんでしょう」

「お前は今日から僕のガードマンだ。事が済むまで絶対逃がさないからな。護衛中の食事は出来るだけ奮発する。飲み物だって好きな時に好きなだけ奢ってやつから。やってくれるよな」

鼓矢は即時に頷いた。

「らじやりました」

流石、臨機応変。すぐに、梅宮は笑顔を見せてくれた。

蒙る喫する、凌ぐも溜まる。

（前書き）

逃亡のセレクトが現状のパノラマを一掃するものであったところで、  
なあと、変わらないさ。

運命という言葉に頭脳が一切使用されない様に、パノラマに関与す  
るのは神経の一部分でしかないんだよ。

そして君には、エスケープが万能のために準備された言葉なのだと  
そろそろ気づいて欲しい。

計略が要される。

疾走が要される。

運命が要される。

ところで、疲れないかい。まあ、ここは一つ煙草でもふかして休息  
したまえ。

逃亡が、君の中で溜まっている。

蒙る喫する、凌ぐも溜まる。

「内訳すら言わず鼓矢を動員させるなんていい度胸ですね」

と、ボディガードに胸倉を掴まれ掛けられて。それじゃあ僕の立場つてものは一体どこそこに存在するのか。仕方ない、自身が理解できる範疇で、その上拙い口語だけれど、僕は詳説を始める事とする。

「神品つて、さっき僕を殺しかけた奴なんだけど、そいつがオリジナルの旧約聖書を持っているんだ。まあ早い話、そこには僕の悪行がちよつとばかり彩り鮮やかに脚色交えながら記録されていて、なんと言うか、指名手配つてやつなんだ」

「尻拭いの必要があるのですか」

うつん。こいつ、事の飲み込みだけは目覚しく迅速なんだよな。

常時、一歩二歩ぐらい先を読み取っているというか。

「じゃあ、悪いのは先輩です。鼓矢は知りません。さっさと大通りに倒れてかつこいい終期を演じて下さい。鼓矢は今とつつつつても忙しいんですよ。こんな所で油飲んでないで、せめて他人の迷惑にならないように自分の首でも絞めていればいいんですよ、そもそも先輩はですね……」

「お口塞ぎだ、味わって召し上げれ！」

僕は急速に茶を淹れ、鼓矢に差し出す。

そうだ。こいつはそういう奴だった。一歩二歩三歩四歩先ぐらい話を横暴に進めては、勝手にそれを読み違えるんだ。そういうところが和める要素でもあるんだけど、対象が自分になると一気に印象が変わるんだな。

「あれは、デマだ。一方通行の歪曲した真実で無理やり逆恨みの口実を作っているに過ぎない」

鼓矢は茶を音を立てて口に含む。結構なお手前で。と、棒読みで茶を褒め、息を吐いて椅子の背凭れへと身を倒す。

「どうでしょうね、先輩って恨まれる仕事してますし、人の嫌なことも生業上、一杯知っています。案外、それは被害妄想じゃなくて、自分を正当化させて、トラジエディーに酔いながら自己満足に浸ってるんじゃないんじゃないでしょうか？」

「随分だね」

「何がですか？」

「君にしては大層思索しているって事だ」

「評価してるんですよ、有難うございます」

「非難してるんだよ。まあ、それも評価の内かな」

「少なくとも、マイナス評価だけだ。」

「ふふへへへ、と禁じえない笑い声を鼓矢は漏らし。僕もそれに習って、声に出して笑う。」

「久しぶりの現象。懐かしい感情。」

「時間の経過を疑うほど鼓矢は変わっていなかった。それが酷く羨ましく、そして安心させられる。」

「それじゃあ、これは仮説だ。僕が僕の都合の良い様に解釈された一説。それでよければ聞いてくれ」

「上等です、鼓矢はそう言って肯く。」

「うん。じゃあ聖書の説明。と言っても、僕自身、それに神品自身すらその大意をどのくらい理解しているんだろうね。でも、その論旨はクレイジーなほど確固されている」

「まあ、大体の宗教団体はそんなものだ。それが、神品一人に限った絶対唯一神教で、信仰者が彼一人だとしてもそれは立派な宗教団体。たとえば、その内容や定義が信憑性に欠けるものであるうと、いや、欠けるものであるからこそ何者かがそれを必死に守ろうとするのだろう。」

「藤堂が綿蕾の取り巻きである現象に近いものなのだろうか。そう思えば少しは微笑ましくなるのだが。」

「創造の限り破壊すべし。破壊の限り創造すべし。これに関し、抑制の抑制を抑制の限り抑制する事。いわゆる、二極論の、また二極

とは対極に存ずる話なのかね」

道具が削がれて削がれて削がれてから手馴染む様に。

道具は手中。削がれた破片は風の中。

埃となつて、舞う。

「根拠を教えて下さいよ、事象じゃなくって」

如如は微少たりとも顔色を変えなかった。意に反す面構えだ。

少し揺さ振ったほうがいいのだろうか。

「如如、お前は共感を求めているのか？」

いいえ。返答に声色は少し低くなった様子だが、面持ちはまだ崩れない。むしろ彼女の存在に余裕げなアトモスフィアさえ漂っている気がする。

この類の不可解には慣れているのだろうか。

如如は気取った風もなく茶を一口啜る。

「だけどな、内訳だけで十分だろ。まあ、僕は被害者である以上、その哲学には僕なりの解釈を持っているんだけど。これすら憶測に過ぎないし」

「話してください」

即答に気が退いた訳じゃあない。しかし、少し躊躇してしまう。

どうも、この子との会話はペースが掴み辛い。

「駄目だ。お前に影響が及ぶ可能性がある」

「……じゃあ、そっちの根拠だけでも」

「別に、思想観念やその感染性を問題にしているんじゃない。浸透力がある話でもないんだ。唯ね」

「唯ですか。唯なら話してくださいよ。唯より安い缶ジュースはありません」

「話を逸らすなよ。そうだな、単純に気持ち悪いんだよ。虫唾が走る。空腹状態の胃袋に水だけを流し入れるような嫌悪感だ。なあ、缶ジュースより性質が悪いだろ？」

「話を逸らしているのはそっちじゃないですか！」

怒号にしては声量が些か少なすぎるか。

しかし、彼女の意思相通はいつもはつきりしている。

「もうちょっと距離を近づけましょうよ。何でいつも鼓矢を避けるんですか」

「手前は危なっかし過ぎるんだよ。他人に深くはまりすぎだ、何でもそうなんだよ。なんていうか、介入レベルを下げるつつうかもう少しラフになれないのか？」

テンポを乱されるだけ乱され、錯誤の内から本音が漏れる。

結局、こうなるのか。

僕ってそんなに昔と変わらないのかよ。そして鼓矢、お前もつと変われ。利口になれ。

他人の不幸を共用しようとするな。

お前は馬鹿なんだから、何を考えなくていいんだよ。

「ああ、訳が分からなくなってきたぞ」

「それはこっちの台詞です、先輩いつも意味不明です！」

「いや、お前ほどじゃねえよ、そこまで落ちぶれてねえ」

「鼓矢は落ち武者ですか？！」

「いや、生い立ちはまさにぴったり」

これは、また別の話だけど。

「鼓矢は腐った犬。うあ、もう侮辱ですね」

「いや、呼んでねえし」

「でも現状は一緒です」

「いや、そこまで自分を責めなくても」

「ニヤニヤしないでください」

「してねえよ！」

「何気に話全然進んでません」

「誰が原因だ！」

「その、神品傑作って男の所為です！」

「いや……、まあ確かにそうだね。うん」

「ああ、もういいです。ゲームをしましょう。先輩の家って確かジエングがありましたよね」

立ち上がり、勝手に部屋を散策し始める。

「お前の脳髓じゃあ、ジェンガはタンスの中にあるものなのか？」

「うわっ、先輩って黒い服ばっか。しかもほとんど正装ですね。まあ、藤堂のタンスにも近いものがありますが、これもなかなかです」  
ジェンガを探しているのではなかったのか。人のタンスを何故漁る。藤堂のタンスをお前は見たのか。そもそも、お前と藤堂って顔見知りだったんだ。しかも、タンスを見るまでの仲。口には出さず、鼓矢の手が本棚に伸びる前に、僕はジェンガを準備することにした。「罰ゲーム搭載でお願いしますよ。じゃないとスリルがありません。鼓矢が勝ったら、そうですね……、今日は一緒に寝るっていうのはどうでしょう。介入レベルは下げられそうでないんで、この際洗い浚い話し合って楽になりましょうよ。ふにゃはは、今日は眠らせませんからね」

「何の話だ」

「未来の話です」

こうして、如如は僕の今日一日の運命を独断で操作。如如曰く、僕は腐った犬になってしまったのだ。これなら、まだ落ち武者の方がマシだ。

誰にだって逃亡の自由はある筈なのに。

のた打ち回って苦悶ジェンガ（前書き）

その夜は酷く長かった。

明日は間違いなく短い。

明後日は間違いなく長い。

人生は間違いなく短い。

## のた打ち回って苦悶ジェンガ

ちなみに、如如はジェンガが強い。僕も強いが、如如は滅法に強い。ジェンガは一見、強者が二人揃えば永遠に終わりそうではない気がするだろう。しかし、僕と如如の場合は違う。

まず、摘み取ったブロックは積み上げる際に三つずつ行儀良く並べる。初めは、ゲームが出来ただけ長く続くようにとの配慮だったが、熱くなってくるとこの行為に悪意が含有し、ブロックを微妙にずらして配置するのである。

つまり、このゲームの勝者とは、ブロックを積む際、いかに塔の軸を作れるかに限る。

軸を作るとは、そのブロックが抜かれたら絶対に倒れるという配置を作ると言うこと。すなわち、幾何学的に塔の存続には必要不可欠となるブロックを作り、又、そのブロックを相手のターンに抜かせるよう仕向けるという事である。

しかし、そのブロックを抜かせる状況を作る事は並大抵の神経じや不可能だ。軸自体を作ることには確かに簡単かもしれないが、軸のブロックを二つ三つと広げる技術が必要とされるからである。

そう。一つのブロックで軸を一本作るのは簡単だ。

だが、三つのブロックで軸を一本作るのは容易じゃない。

「三つ並んでるよ、そのブロック。抜けるよね？」

如如が平然と言った。心底では椅子から転げ落ちるほど大笑いしていることだろう。

下から数えて十九段目。ここまで頑張ったが、もう限界だった。

僕は、軸となるブロックをトラップと呼んでいる。

そのトラップが塔全体に行き渡った瞬間にゲームは終わるのだ。

ルール上、一番上のブロックは勿論取れない。

その二段下に三つ並んだブロックがあるが、これはトラップ。

右を取れば左へ。左を取っても左だ。そして、中を取ればこちら

側へと倒れることだろう。

塔は気づけば大層、歪な形を成していた。

「ピサの斜塔が見て驚くな」

手詰まりだった。将棋やチェスと同じで、詰まれば成す術は無い。

三つ並んだブロックは一見抜けそうに見える。

しかし、経験と勘で分かってしまう。

抜けば絶対に倒れる。

「ドロップアウト。もう無理だよ」

僕は両手を挙げた。

「不甲斐ないですね。鼓矢はまだ、って言ってももう一本だけですけど、いけましたよ」

「なんだって？」

鼓矢は立ち、先ほど僕が葛藤した段と同じ、十九段目を凝視。しばらく見た後、右端のブロックを右手で摘んだ。

無理だ。そのブロックを引けば、塔は左へ崩れるだろう。

「……」

しかし、如如に諦めた様子はない。

右手が一ミリ動かないか。主軸を動かされ、塔は全体がぐら付く。そのまま。如如の体が右へ九十度回転した。しかし、右手が動いたのは僅か二ミリにも足らず。塔が大きく揺れる。

揺れが収まったら、再び左へ九十度回転。しかし、ブロックは内側に動いた。

ブロックを戻しているのだ。

「まさか……」

僕の頭に一つの可能性が横切る。それは元々僕の頭にはあったものだ。しかし、それすら僕はやるうとはしなかった。

出来る筈が無い。

「勿論、一度触ったブロックを抜かないとアウトですからね。その間に他のブロックを触るのもタブー。ちゃんと分かっていますよ」

額に汗を滲ませ、如如は少しかがんだ。右手が僅かに揺れる。

「うっん。上手く行きませんね」

そう言い、ついに如如は左手でテーブルに手を出した。淵を持ち、角度を三度足らずほど傾ける。

塔は倒れたかと思った。情けないが、一緒になって僕までが動揺している。無論、塔の崩壊は無い。

「よし、これで少し動きました」

如如は、次に僕の方に向かって歩く。ぐりぐりとブロックを微妙に動かしながら。

「ちよつとどいて下さい」

僕はテーブルを動かさぬよう静かに立ち上がり、戦場を離れる。

如如は僕が腰掛けていた椅子の前まで動いた。丁度、百八十度ブロックを回したこととなる。

木のブロックは摩擦が大きいかから厄介だ。この技がどれほど難儀なものか、経験者の僕には痛いほど伝わってくる。

「行きますよ」

静かに、ブロックを引く。それは素直に抜かれた。

否、その様に見えるだけだ。

トラップのブロックを……、正常なものへと引っくり返しやがった。

元々トラップとなって詰まれたブロックを、塔全体を微妙に動かして、又、他のブロックを少しずらすことで、彼女はあるうことか、塔の軸を動かしたのである。

反則を通り越した神業だった。

にやへへ、と至極嬉しそうに微笑む。右手にはブロックが一個。

「恐れ入ったよ。僕の完敗だ」  
「昔の先輩だったらあれくらいの事はやったでしょうけどね。腕が鈍ってるのではないでしょうか。折角ハンを付けたというのに」  
「ああ、全くだ」

如如は、左手を広げた。

彼女は左利きだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1355b/>

---

駆られる爆ぜる、担って飛べる。

2011年1月16日07時13分発行